

山田洋次作品集

2

立風書房

山田洋次作品集

2

山田洋次作品集 2



1980年2月10日 発行

山田洋次作品集 2

山田洋次

発行者——下野博

発行所——株式会社立風書房 東京都品川区東五反田3の6の18

振替——東京五——七四四九三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします) 0095—R6302—8909

山田洋次作品集

2

目次

馬鹿が戦車^{タンク}でやってくる

運が良けりや 77

なつかしい風来坊 165

僕の探偵物語 249

喜劇映画消滅願望 302

解説Ⅱ 森崎東 306

装幀・多田 進
装画・出川 三男

馬鹿が戦車^{タンク}でやってくる

高	穂	小	田	常	菅	岩	花	飯	犬	ハ
橋	積	沢	武	田	井	下	沢	田	塚	ナ
幸	隆	昭	謙	富士夫	一	志	徳	蝶		
治	信	一	三		郎	麻	衛	子	弘	肇

監 編 照 錄 美 音 撮 脚 原 製

1964年12月26日封切	監督	集	明	音	術	楽	影	本	案	作
	山田洋次	浦岡敬一	戸井田康国	小尾幸魚	佐藤公信	園伊玖磨	高羽哲夫	山田洋次	團伊玖磨	脇田茂

メイン・タイトル——馬鹿が戦車^{タンク}でやってくる。つづいてクレジット・タイトル。

波一つなく静まりかえった昼の海。

ポチャポチャと舟板に当たる水音がしている。

「アーアーアー」
と大欠伸^{あくび}の声。

釣船の上

欠伸をしたのは会社員風の若い男。

「フアーア……か」

つられて欠伸をしたのは反対側で糸を垂れている会社の上役らしい中年男。

若い男「さっぱりですね、課長」

中年男「食わないねえ」

若い男、艫^{かき}の船頭に向かって声をかける。
若い男「船頭さん、駄目だよここは」

陽焼けした初老の漁師、のんびり答える。

船頭「場所変えっかな、あげとくれ」

二人の客、急いで糸をたぐり上げる。

漁師、バタバタとけたたましい音を立てて焼

玉エンジンを始動させる。

若い男「だいぶ遠いかい、今度んところは」

船頭「ああ、タンク根まで行くけえ、小半刻^{とぎ}ばかり

かかんな」

若い男「(中年男に)小半刻……じゃ課長、めしにし

ますか」

中年男「うむ」

釣船、ドンドンと古びたエンジンの音を立てて走り出す。

中年男、にぎり飯に手を出しながら、船頭に

問いかける。

中年男「船頭さん」

船頭「ああ」

中年男「今、タンク根に行くとか言ったね」

船頭「ああ」

中年男「何だね、そりゃあ？」

船頭「ああ」

白い歯を見せ、苦笑の様子。

若い男「東京湾に飛行機根つてのがありますね、B 29

が落ちたつてとこ」

中年男「あるある。(笑いながら船頭に向かい)する

と、そこは戦車でも沈んでんのかい？」

船頭「ああ」

二人、びっくりする。

若い男「本当に沈んでんのかい、おい？」

船頭「ああ」

若い男「ははあ、すると終戦の時に戦車隊が捨てたん

だな、タンクを……」

船頭「いんにゃ、違う」

中年男「じゃ、どういう訳なんだい？」

船頭、ポケットから「新生」をとり出しなが

ら、ニヤニヤ笑う。

船頭「なあ、あんたらに話しても、とても本気にゃ

しめえよ」

二人、顔見合わせる。

中年男「何だか面白そうじゃないか、ええ？」

若い男「話してくれよ、小父さん」

船頭、古びたライターを出して、煙草に火を

つける。

船頭「面白えかどうか知らねえが、あんたら日永ち

ゅうとこ知っとるかの」

中年男「いいや、日永って、どう書くんだい？」

船頭「日が永えと書いて日永ちゅうだ」

若い男「日永か……いい名前だね」

船頭、煙草をのんびり吐き出すと陸の方を眺

める。

船頭「いいか悪いか知らねえが、日永の人間ちゅう

と、ちいと変わった奴ばかりでの。(指さす)ほ

れ、あすこに形のええ、まるい山があるの……
あの向うが日永だ、何のとりえもねえちいまい
村だかの」

三人の視線の先、なだらかな山が、ゆっくり
動いて見える。

船頭「もう四年……いや、五年程前のことだ」

街道

白っぽいデコボコ道を百田巡查が、バイクに
乗って来る。

ナレーション「このはずれに村一番の貧乏人の一家が
住んだったが、村に初めて来た奴ア、まず大概
ここでびくくらしただんだ」

サブの家

百田巡查、バイクをとめて帳面を見ながら入
口に向かう。

朽ちかけた母屋。その横手に汚ない納屋、そ

の屋根から鉄管のごときものが天に向かって
つき出している。

壁に下手くそな文字の看板。

“農器具、トラクターその他諸機械修理し
ます”

入口に向かう百田と出会い頭に兵六が出て来
る。変な帽子をかぶり、眼つきのちょっと変
な、しかし何だか子供のようなあどけない表
情の男。

百田、気さくに声をかける。

百田「やあ、いい天気だな」

兵六、キョトンとしている。

百田「お宅は椿さんだな」

兵六、空を見上げ、口笛で鳥の鳴き声を出
す。

百田、びくくりしていると、兵六、納屋にヒ
ョコヒョコ上がり、鳥のような格好でしゃが
みこみ、口笛を吹く。

百田「何だい、氣狂いか?……」

とボヤキながら家の中へ入る。

サブの家・中

サブの母とみが台所の隅で漬物をつけている。

百田、入って来て、

百田「今日は! 今日は……」

とみ、氣がつかない。

百田「おばあさん! おばあさん!」

とみ、全然氣がつかない。

百田、首をふると諦めて表へとって返す。

サブの家・外

百田、出て来て納屋の屋根の上を見る。

兵六が上に登って鳥の鳴く真似をしている。

百田「おい、危ないぞ危ないぞ、おい降りろ……降りろ……」

屋根からつき出た鉄管に氣づいて警棒を出し、コンコンと叩く。その途端、男の声「誰だ、いたずらする奴ア!」

びっくりしてとびのく百田の前に、納屋の小さな戸を開けてとび出すヒゲ面のおっかない男、サブ。

百田「……」

サブ「何じゃい、駐在さアか、何の用じゃ、俺ア悪い事してねえぜ」

百田「ああ驚いた……別に何ちゅう訳じゃないだな、今の山中の駐在に転任して来たからして、初めてパトロールに来たんだが……ええと、あんたこの世帯主?」

サブ「ああ、それがどうしたい」

百田「ただ聞いてるだけだがな、その屋根からつき出してる鉄管は何だ、エントツか?」

サブ「何だろうと大きなお世話だい、それとも屋根からつき出していけねえって法律でもあんのか」

よう」

百田「（ムカッとして）何ちゅう口のきき方だい、そりゃ、あんた何か警察にうらみでもあんのかね？」

サブ「ないわい！」

と凄（す）んで見せた時、屋根の上からバタバタと兵六がとび降りる。

驚いてよける百田。

サブ、兵六を怒鳴りつける。

サブ「兵六！ 危ねえでねえか、羽がなきゃ飛べねえって何遍言ったらわかるんだ！」

兵六、叱られてションボリする。

そこへ、とみが茶をもつて現われる。

とみ「ああ、これはこれは、いいお日よりで」

サブ、大声でとみに説明する。

サブ「母ちゃ！ この人は山中に新しく来た駐在だ

あ」

とみ「あれえ、そうかい、ご苦労さんです」

百田「ああ、どうも」

サブ「今日はバトロールだと。（百田に向かい、これもついでに大声を出す）お茶でも飲んでいかねえか！」

百田、慌てて手をふり、

百田「いや結構、公務中だからしてな」

百田、出て行く。

街道

畑のあぜ道に半分ほどうめた大きな石を懸命に動かそうとしている老人仁右衛門。古ぼけた帽子に奇妙な服。不格好なステッキ。何とも珍妙な風采である。

百田がバイクから降りて呼びかける。

百田「おい、じいさん！ 何しとるかな！」

仁右衛門が答えないので、傍に歩いて行きながら大声を出す。

百田「おい、じいさん！ じいさん！ 耳でも遠い

のかなあ」

仁右衛門、むずかしい顔で怒鳴り返す。

仁右衛門「ええい、やかましい、まだ耳の聞こえんほどモロクしとらんわい」

百田、呆れ顔で、

百田「何だい……石どけるのかい、おれも手伝ってやろう」

と石に手を出す途端、仁右衛門が一喝する。

仁右衛門「ええい、余計な事するな」

つきのける。

百田巡査、土手からすべり落ちる。

そこへ街道の方からサブが来る。

サブ「おーい！ 何をするんじゃ何を……おーい！」

石にとびつくと反対側から押し出す。

仁右衛門「われが昨日動かしたのを、元に戻すだけじゃい」

サブ「何を言うとか、このねぼけ爺様ア、俺アこ

の十日もいじらんぜ」

仁右衛門「嘘っぱちこくな、一寸五分も動いてるじゃ

ねえか」

サブ「ふん……ネズミが引いたんと違うか」

仁右衛門「何だア」

サブ「何じゃい」

と二人つめよる。

百田、間へ入る。

百田「まあ、どうしたんだよ」

仁右衛門「あっち行つてろ！」

と、突きとばされる。

百田、土手からすべり転がり落ちる。

農夫の九作がとんで来て百田を助け起こす。

九作「おい、いいから、いいから、おい、あの二人の喧嘩に口出すもんでねえわ」

百田「しかし、ほっとく訳には」

九作、百田をひっぱって歩きながら、

九作「ほっちゃったときゃええがな、珍しくもねえ、

あの二人は十日に一ぺんはああして畔道のへつきり石のことで喧嘩するだからな、もうかれこれ十年前からだ」

百田「十年？」

畑の上では仁右衛門とサブが石の両側で言い争いながら押し返したり戻されたりしている。

紅屋

百田がバイクをとめ、タバコ屋兼駄菓子屋兼酒屋の店先に首をつつ込む。

百田「今日は！……今日は！留守ですか？」

奥で男女のささやき声。

百田、ちよつと覗く。

百田「今日は……？」

びっくりして眼をそらす。

女「はい」

ちよつと色気のある赤八のおかみのたねが髪

ふり乱し、着物の前をあわせながらバタバタ来る。

たね「おいでなさいまし」

百田「こりゃどうも……失礼しました」

たね「ありゃまた、どうしましょう」

真赤になって照れ笑いをする。

奥から赤八、ノコノコ出て来て、

赤八「ほう、新任の駐在さあなか、こりゃ、えれえとこ見つかっちまって、ヘッヘッヘッ」

百田「……どうも失礼します」

固くなって表へ出る。

紅屋・表

百田、汗を拭きながら出て来る。

奥から赤八とび出して、

赤八「まあ、茶でも一杯やってけや、ヘッヘッヘッ」

百田「……」

道のへりに立っている停留所の看板を見て照れかくしに言う。

百田「変だな、ここはバスは走っとらんはずだがなあ」

赤八「ずっと前に走ったことがあっての、乗り手がねえもんだからして、赤字ですぐ止めちまったわ。五年程前の話だよ」

傍に立ったたねも言葉をそえる。

たね「四年前だよ、うちが嫁に來た年だからして、

フフフ」

赤八「ヘッヘッヘッ、そうそう」

百田「……じゃ失礼します」

と、百田へきえきしてバイクに乗る。

床屋の表

親爺と茂十がのんびり茶を飲んでいるところ

へ百田がバイクをとめる。

百田「今日は」

親爺「ああ」

茂十、親爺、ジロツと百田を見る。

百田「やあ、いいお天気で」

親爺「……」

百田「あのう、橘仁右衛門さんの家はあっちですか？」

親爺「この道、ずーっと行っただこだが」

百田「どうも」

茂十「あんた新任の駐在かな？」

百田「はあ、よろしゅう」

親爺「まあ、茶でも飲んでけや」

百田「いや、公務中だからして」

そそくさとバイクを走らせて去る。

見送った二人。

茂十「落ち着きのねえ男だのう」

仁右衛門の家

がっしりとした大きな門構えの家。

百田、バイクを降りて中に入る。

仁右衛門の家・玄関

だだっ広く薄暗い室内。

百田、キョロキョロしながら入って来て

百田「今日は……今日は……留守ですか？」

奥から下女の老婆かねが顔を出す。

かね「何ぞ用かな……」

百田「橋仁右衛門さん居りますか？」

かね「だんさまは留守だ」

百田「どこへ行ったかね？」

かね「知らねえ」

百田「何時頃帰るかね？」

かね「知らねえ」

百田「……？」

仁右衛門の家・庭

百田「何だい、全く、どういつもこいつも……」

中庭

ブツブツ言いながら出て来て、ふと中庭に眼をとめる。奇妙にそこだけが美しく、秋の花が咲いている。

百田、入って来てぬれ縁に腰をおろす。

ポケットから煙草をとり出し、何の気なしに部屋の中を見てギョッとする。

離れになったその室内は、母屋とはうって変わった優しい調度に飾られ、白いシーツにおおわれた布団の上には美しい横顔を見せて、スヤスヤ寝息を立てている娘がいる。

枕元には薬瓶、体温計。

一見してそれは病床である。

百田「……」

夢かとはかり驚いて腰を浮かす。その時、

「こら、お前、何しとるんじゃ」

と背後から声をかけられ、びっくりして振り

返ると仁右衛門が立っている。

百田「何だい、さっきの爺さんか、おらあ橋仁右衛門さんに逢いに来たんだよ」

仁右衛門「仁右衛門はわしだ」

百田「(びっくり) あ……これは、これはどうも失礼しました……(慌てて敬礼する) 私この度山中の駐在に転任して来ました百田巡查です。先

任の五島さんから、日永に行んだら第一に橋仁右衛門に挨拶せえと言われましたんで……」

仁右衛門「ほれで？」

百田「ほれで、来ました」

仁右衛門「ほれだけか？」

百田「はあ？」

仁右衛門「娘の部屋をのぞくのは何のためだ？」

百田「いや、そ、それは」

女の声「お父さん」

眼をさました紀子が仁右衛門を制する。

百田「(紀子に向かい) どうも失礼しました」

紀子「すみません、父はいつもあんなふうで」

仁右衛門「用が済んだら、早ういげ」

百田「はい、いげます！」

緊張して挙手の礼をする。

仁右衛門の家・表

百田、そそくさと出て来て、バイクに跨^{また}がり、塀より中をのぞく。その途端、

仁右衛門の声「誰じゃ！ そなたらところからのぞく

奴ア！」

百田、びっりして、バイクと共にひっくり返る。百田、起き上がってバイクに乗って一目散に逃げ出す。トンビがピーヒョロロと鳴いている。

釣船の上

ボンボンと波を蹴立てて進んでいる。

二人の客、感心して聞いている。